

Rehast ~ピチャリ~

七飯町歴史館だより

第186号

ななえ古写真物語 VOL.186

大沼公園昔語り

旅館 盛武蔵のこと

大正時代か

大沼公園



現在の大沼公園駅周辺が公園化していくのは、明治36年に函樽鉄道の敷設がなされたことが、大きな要因となっていることは、これまでも綴ってきましたが、観光地として大沼が発展することへの期待は、大沼初の観光案内書といわれる『北海道の一大楽園 大沼案内記』が同じ年の7月に刊行されたことからもうかがえます。同書は軍川大沼停車場の敷嶋館の西田秀一郎によって、大沼における伝説や歴史、大沼の展望などを記したものですし、ほかにも大沼公園広場の南側高台に建てられた旅館「紅葉館」が宮川勇によって開業したのも同年8月であることを考えると、明治36年は、大沼の歴史を考えるうえでとても重要な節目といえるでしょう。

ところで、前述の紅葉館の隣には、「盛武蔵」という旅館が建てられていました。それが写真の建物になります。2階建て、客間6室で、そのうち2階にある2室は、内装も外装も洋風のつくりになっており、室内にはイスとテーブルを備えられましたが、1階はすべて4畳半の和室だったようです。鉄道が往来するようになると、盛武蔵は大沼公園鉄道指定（この場合、推奨の意味合いが強い）の宿泊所として、ほかの絵葉書で紹介され、鉄道の敷設によって客足が増えたため、1階に、10畳間2室を増設したそうです。

盛武蔵についての詳細は、大正5年にここで誕生し、育った千葉昇氏が、自身の記憶と新聞記事などの豊富な史料調査によって綴った『北海道大沼公園昔語り』（平成19年発行）に記されています。

それによると、館主は山内クマという女将で、開業当時は30歳に満たなかったそうです。しかし、明治15年~20年ころ、すでに大沼で旅館業を営んでいた川口捨次郎と懇意だったため、開業できたのだらうと推測していますが、明治時代終わりには、旅館の経営を千葉氏の父上に経営を継承、大正10年ころ、旅館名を「大沼館」と改めました。これらのことから、上の写真は明治20年~大正10年の間に撮影され、発行した絵葉書と考えられます。

また、千葉氏は同書で盛武蔵の両脇に、宮川勇の紅葉館の建物が並んでいること、盛武蔵の建物の老朽の度合が、ほかよりもはるかに古い印象だったこと、玄関の引き戸に青や赤のガラスがはめ込まれるなどの建築様式の違いから、鉄道開通以前より開業していた可能性が高いと推察しています。

今はまだ、千葉氏の推論を実証する史料を、探せていませんが、大沼公園の歴史の奥深さを感じます。今後の調査によって、新たな歴史を発掘できそうで、密かにワクワクさせられる一枚の写真の紹介でした。

27日 町なかの自然をめぐる

ジュニア探検クラブで歴史館の周辺にある巨樹・古木をめぐるしました。イチヨウの巨樹、幹の中をくぐることでできるトチノキ。鳥の声や虫のうごめきにも気を付けながら、ルーペを片手に花やコケなども観察しながらの散歩です。午後からは、車で移動しながら、アカマツだけではないアカマツ街道など、史跡と古木がセットになっている箇所を巡りました。「山の神で、なぜクリとハリギリと一緒に植えるのか？」など、子どもたちは、町あるきのさなか、様々な謎にも出会っていたようでした。



新函館北斗駅に展示しています。

新函館北斗駅の改札口を出て右手、南北連絡通路に、歴史館で所蔵しているコレクションの一部で昭和10~20年代に当時大中山中学校の教諭だった高橋秀雄氏が蒐集した、縄文時代中期と晩期の土器が展示されています。再整理作業を終え、新たな息吹を得た土器が、その魅力を存分の感じてもらえるように、厳選の末に選んだ土器を展示しています。駅を利用される折には、ぜひご覧下さい。



修復作業を継続中です。

土器の再整理は石膏で破損箇所を埋め、埋めた部分に色を塗り、周りとの調和を整え、破損前の雰囲気近づけるように作業を進めています。石膏を埋める作業は、水で溶いた石膏は、すぐに硬化してしまうので、急に電話に出なければいけないときは、半ば諦めてしまいます。色塗りは、自然に見えるように土器の色に近い色を、単色ではなく、薄い色を少しずつ重ねて、もともとの色に近づけるよう工夫しています。どれも、技術と経験が要る作業です。



7月の予定	
1	土
2	日
3	月
4	火
5	水 夜の博物館第2夜
6	木
7	金
8	土
9	日
10	月
11	火
12	水
13	木
14	金
15	土 図書無償配布開始(ロビーにて)
16	日
17	月
18	火
19	水
20	木 ピチャリ第187号発行
21	金
22	土
23	日
24	月
25	火
26	水
27	木
28	金
29	土 ジュニア探検クラブ
30	日
31	月

※7月の休館日はありません

堇(スミレ)

仁山山頂で咲いていたスミレ。美しい紫色の凛とした姿は目に焼き付く姿でした。花ことは「謙遜」「誠実」



編集後記 ~tawagoto~

この文章を書いている日は太宰治の桜桃忌。高校生のころ、背伸びして読んだ「人間失格」は、陰鬱な雰囲気が漂い、十代でその世界を理解するには、やや難しかったが、その世界に想像をめぐる感覚は、今もよく覚えている。大人になり、読み直しをしないと、玉川上水に行き、太宰の通ったバーの付近も歩いた。ネットでは瞬時に情報が得られるが、興味の対象に足を運び、そのときの空気やにおいが記憶の定着になることを改めて大切にしたい。

~ピチャリ~
Pichari

第186号

令和5年6月20日発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail : rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp